

# 北上山地山村の生存戦略の成立条件

## ナラ林・製炭・地頭名子制・奉公

Materialized Conditions of the Surviving Strategy in the Villages of the Kitakami Mountains, Northeast of Japan

岡 恵介

はじめに

① 調査した集落の概況と周辺の植生

② 堅果類の利用

③ 生業の変遷と「居住地域内完結型生存戦略」成立の背景

おわりに

【論文要旨】

北上山地の山村ではかつて凶作・飢饉が頻発し、藩の重税や耕地面積の狭さもあって、通年分の食料をいかに確保するかは最重要の課題であった。北上山地の山村の人々の多くは地域の野生植物を最大限に利用し、山を開墾して耕地面積を広げることによって、不足しがちな食料を確保してきた〔岡 1990〕。このような戦略を「居住地域内完結型生存戦略」ととらえ、東北の山村では一般的な戦略だとする意見もある〔名本 1996〕。

筆者の調査地である北上山地の山村・岩泉町安家においては、戦後の食糧難の時代にも、シタミ（ナラ類の堅果）がアク抜きして利用され、焼畑が開墾された。これらは藩政時代の飢饉時の対応とほぼ同じであり、いわば100年以上の有効性を持ち得た持続可能性の高い戦略であった。この戦略をとるためには、東北地方の中でも北上山地に集中して分布する、広大なミズナラ林〔青野ら 1975〕の存在が不可欠であった。そして藩政時代のたたら製鉄や昭和10年以降の製炭産業の経営にも、豊かなミズナラ林が必要であった。

安家にも出稼ぎは明治期から一部にあった。しかしこの居住地域外を志向する生存戦略が拡大しなかったのは、明治以降に発達した地頭名子制度によって、村人が小作・名子化していったことと、農村恐慌対策による通年稼働型の製炭産業の隆盛が大きかった。

農村恐慌の時代には、東北農村からの娘の身売りが問題になった。しかし安家では、食料の確保が難しかった家は村内の富裕層に子供を奉公に出したため、外部への娘の身売りはなかった。また山村の富裕層は、平地農村の娘を引き取って育てることもあった。

これらが可能だったのはまだ山村の経済がかなり自給的だったためで、その自給性を畑作・焼畑と共に支えたミズナラ林の存在は大きい。富裕層は小作・名子の労働によって豊かだったのであり、その小作・名子の生存を支えた柱の一つとしてシタミがあったからである。

## はじめに

山村における、地域内の自然環境から野生植物を採集・加工して食料を獲得し、貯蔵して自給性を高めることにより生存を図る戦略について、本稿ではとりあげる。

北上山地は、かつてヤマセと呼ばれる季節風や遅霜などによる凶作・飢饉が頻発した地域であった。これに当時の南部藩の重税政策や鉄山への徴用、山間の絶対的な耕地面積の狭さも加わって、山村に住む人々にとっては通年分の食料をいかに確保するかが、最重要課題であったといつてよい。こうした北上山地山村においては生存のために食料を確保する技術として、①周囲の自然環境から食用可能な野生植物を採集し、必要に応じて加工処理して日常食として利用し、あるいは救荒食として保存する、②山村の自然環境に適合したヒエ・アワ・キビ・ソバなど様々な雑穀や、大小麦などの多品種を少量ずつ栽培して危険分散を図りながら、実ったものを利用する、があり、この二つの技術を複合的に組み合わせて山村の人々は生きてきた〔岡 1990〕。

そしてこのようなミニマムな生存を支える技術は明治期以降も伝承され、また使用されていた。近年においては「欠配<sup>けっぱい</sup>」と呼ばれる、第二次世界大戦後の昭和20年から5年間ぐらゐの間の、供出制度によって畑作の収穫物を供出させられながら配給制度が滞ったため、食糧が不足した時代にも用いられていた〔岡 1996〕。

これとは対照的に見える例も報告されている。同じ北東北でも青森県の津軽地方においては、藩政時代から新田開発が盛んに行われ、稲作中心の経営がなされてきた。このため津軽藩では深刻な凶作・飢饉が起ると、もともと他国からの流入者である農民は逃亡し、棄田・廃村が繰り返された。また近世後期から現在に至る出稼ぎが常態化してきた。さらに北上山地であればどこでも聞かれるドングリなどの堅果類の貯蔵と利用の経験を津軽の山村では持たず、農村においても救荒食に関する伝承は極めて希薄であるところから、津軽の農山村は、危機的な状況下にあっても所与の環境を利用しながら最低限の自給を図る北上山地の山村と異なり、地域内の資源を利用することよりも地域外に出ていくことで、その生存を図る「居住地域外志向型生存戦略」をとっていたのだとする見解もある〔名本 1996〕。

ただしこの議論のなかで名本は、筆者が明らかにしてきた北上山地山村の生存戦略を「居住地域内完結型生存戦略」と名付け、「東北の寒冷な地域でみられる生存戦略〔名本 1996:10〕」として、かなり広範囲にあてはまる戦略と考えているようにみえる。だが東北の他地域にこの生存戦略が共有されているか、北上山地山村と同じ戦略をとるために必要な諸条件を備えているのか、についてはまだ明かではない。

そこで本稿では、北上山地山村の「欠配」時において、域内の自然環境から野生植物を採集・加工して食料を獲得し、貯蔵して自給性を高めていた具体的な事例やそのバリエーションと、その持続可能性をさぐり、先に述べた①の戦略のなかでもその利用頻度からみて中核的な存在であった、堅果類の利用を可能にした北上山地の植生との関係を探りつつ、さらにこの戦略が北上山地の山村に成立し得た社会的な背景には何があったのかを検証していきたい。

なお本稿で用いる「居住地域外志向型生存戦略」および「居住地域内完結型生存戦略」は、名本

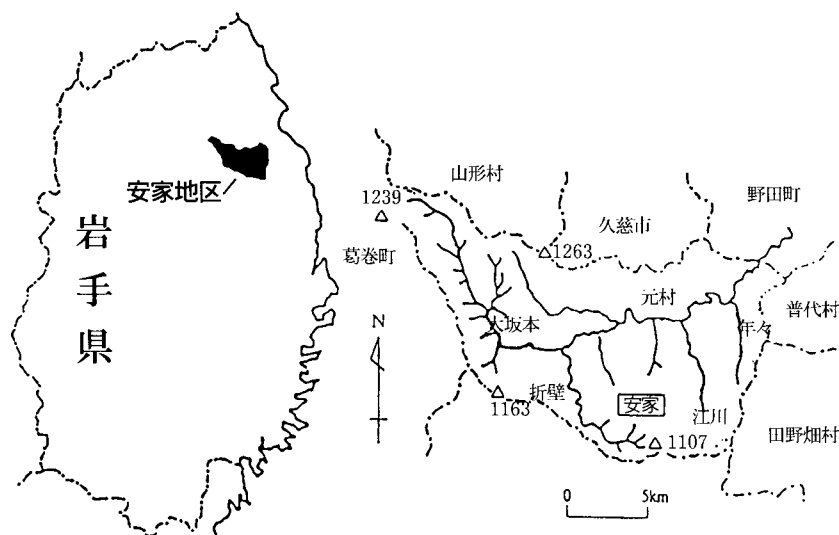


図1 安家地区の位置

[1996] が分析のために使用した造語であり、筆者はこの用語が必ずしも適切であるとは思わないが、本稿ではこの分析を検討することが主目的ではないので、カッコ付きでこれをそのまま用いることにする。

## ①……………調査した集落の概況と周辺の植生

調査は、岩手県の北上山地に位置する山村・岩泉町<sup>あつか</sup>安家（図1、旧安家村）の下流域にある年々集落と上流域にある大坂本集落の2地点を選び、聞き取り調査を行った。

年々集落は、図1に示したように、岩手県下閉伊郡岩泉町の北東部に位置する安家地区（旧安家村）を流れ太平洋に注ぐ安家川の支流・年々川沿いに分布する集落である。標高は約300メートルで、現在の戸数は15戸、山林の伐採または土木工事の日雇いで主な現金収入を得ており、また優良な短角牛の生産地としても著名であったが、牛肉の輸入自由化以降、仔牛の販売価格は低くなり、経済的には低迷が続いている。家まわりの少ない耕地では自家消費用の作物や牛の飼料が作られ、目立った換金作物はない。かつて旧安家村は、地頭名子制度の発達した地域として知られ、研究も多い〔例えば、積雪地方農村経済調査所 1938、松尾 1980など〕が、その中にあってこの年々集落は名子を出さず、そのほとんどが自作農であったという特徴を持つ。

大坂本集落は安家川沿いでもっとも上流部に位置し、標高は約500メートルで、戸数は9戸、生業は年々地区とほぼ同じである。なお、筆者は現在この集落に居住している。第二次世界大戦後の農地開放以前には、名子や小作農であった家もある。

次にこの地域の植生についてであるが、北上山地の低山の自然林の特徴として、ブナ林にかわって純林状のミズナラ林があることは、早くから指摘のあるところであり、北上山地中北部ではミズナラ林が極相林として成立しているとする見解もある〔青野ら 1975〕。同じ岩手県でも奥羽山脈

表1 安家川上流地帯の森林の垂直分布 (石塚, 1968より引用)

| 標高        | 残存自然林   | 普通の2次林<br>(樹高10m以上) | 矮林   |
|-----------|---------|---------------------|------|
| 700~750 m | ブナ      | ブナ・ミズナラ             | ミズナラ |
| 650 m     | ブナ・ミズナラ | ミズナラ                | ミズナラ |
| 500 m     | ミズナラ    | ミズナラ                | ミズナラ |
| 400 m     | ミズナラ    | ミズナラ                | コナラ  |
|           | —       | コナラ                 | コナラ  |

側では、海拔200メートル近くでもブナの純林があった形跡があるのだが、北上山地ではブナ林の下限が奥羽山脈よりはるかに高く、この下にミズナラの純林がある〔石塚1968〕。

これについて青野ら〔1975〕は、ミズナラはブナに比べて開葉期が遅いため、晩霜の激しい北上山地ではミズナラ林が低山帯に優占するのだと説明している。

石塚和雄が提示している表1〔石塚1968〕のように、安家川流域の標高400メートル以下では、局地的なアカマツ林を除けばコナラ林が広く分布している。標高400から500メートルの間でもコナラ林が引き続き優占するが、樹高10メートル以上ではミズナラが卓越し、潜在的にはミズナラ林であったと考えられる。標高500メートル以上では、矮林もふくめてミズナラになり、標高700から750メートル以上では、潜在的にはブナの純林だと思われるブナ・ミズナラ林が分布している。また岩手県ではコナラ二次林にクリをとまなうことが多いのであるが、この地域では二次林のクリはコナラ林よりもかなり高く、ミズナラ二次林の下部がミズナラ・クリ林の型を示すことが多いことも指摘されている。

本稿でとりあげる2集落はそれぞれ、下流の年々集落はコナラにクリを伴う林が優占する植生の中に位置し、上流の大坂本集落は潜在的にはミズナラの純林に近い植生域に位置していることになる。

## ②……………堅果類の利用

筆者は「欠配」の時代における野生植物の利用について調査し、すでに発表している〔岡1996〕。そこで得られた結論は、以下のように要約される。まず、季節的に利用可能な野生植物・菌(キノコ)類が採集できるのは、圧倒的に春と秋に偏っていること、そして「欠配」の頃など本当に食糧に困っていた時代よりも今のほうが、実際に食べるかどうかは別にして、あれが食べられるとか、食べられるそうだと知っているもの(とくに菌類に多い)は増えていることがあげられる。つまり、食べるのに困っていた時代には知らなかった食用になる植物やキノコがあったことを、その後、外からの情報や本などで知ったという事例がかなりあること、しかし「欠配」のときに利用された野生植物を加工して作られる食品を見ると、そうした惣菜とか副食になるようなものよりも、主食に似た状態に加工できるもの、あるいは主食を増やすことの出来るものを多く採集して利用しようとする傾向があることを指摘した。

表2 春の可食植物の利用

| 和名         | 方名            | 利用形態            |
|------------|---------------|-----------------|
| アサツキ       | アサツキ          | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| アザミ類       | アザミ           | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| アマドコロ      | トコロの根         | 欠配時に利用, 保存せず    |
| イタドリ類      | サシトリ          | 近年になって利用, 保存せず  |
| イタヤカエデ     | イタヤのモエ (新芽)   | 救荒時利用と伝承        |
| ウコギ類       | ウコギのモエ (新芽)   | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ウド         | ウド            | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| オオバギボウシ    | ウルイ           | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| カタクリ       | カタカゴの根        | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| カンゾウ類      | カンゾウ / カンゾウ   | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ギョウジャニンニク  | アイヌネギ / キトウビル | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| クサソテツ      | コゴミ / セツパリ    | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| サワアザミ      | サガリハ          | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| サンショウ      | サンショウのモエ (新芽) | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| シオデ        | シヨンドコ         | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| シャク        | ヤマニンジン        | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| スギナ        | ツクシノボウヤ       | ごく一部で利用, 不味とされる |
| セリ         | セリ            | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ゼンマイ       | ゼンマイ          | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| タラノキ       | タナボ (新芽)      | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| タンポポ類      | タンポポ          | ごく一部で利用, 不味とされる |
| ツリガネニンジン   | ノノバ           | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ドロノキ       | ドロノキのモエ (新芽)  | 救荒時利用と伝承        |
| ノイバラ       | オニバラのモエ (新芽)  | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ノビル        | ヒル            | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| フキ         | バツケ (花茎)      | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ミツバ        | ミツバ           | 近年になって利用, 保存せず  |
| ミヤマイラクサ    | アイコ / エエ      | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| モミジガサ      | シドケ           | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ヤマグワ       | クワのモエ (新芽)    | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ヤマブドウ      | ヤマブドウのモエ (新芽) | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ヨブスマソウ     | ボウナ           | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ヨモギ        | ユムギ           | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ワサビ        | ワサビ           | 欠配以前から利用, 保存せず  |
| ワラビ        | ワラビ           | 欠配以前から利用, 乾燥保存  |
| 未同定 (ユリ科?) | カヤの根          | 欠配時に利用, 保存せず    |
| 未同定        | セイタカバナ        | 欠配以前から利用, 保存せず  |

表3 夏の可食植物の利用

| 和名        | 方名            | 利用形態               |
|-----------|---------------|--------------------|
| アカザ       | アカザ           | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| ウバミソウ     | ミズ            | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| エゾノキツネアザミ | ハナグサ          | 欠配以前から利用, 時に乾燥保存   |
| オヤマボクチ    | モチケエバ / ヤマゴンボ | 欠配以前から利用, 乾燥保存     |
| ゴボウ       | ヤマゴンボ         | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| スベリヒユ     | ビョー / ビュー     | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| タモギタケ     | ワケ            | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| ナワシロイチゴ   | バライチゴ         | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| 未同定       | キンギョグサ / カワグサ | 救荒時利用と伝承           |
| フキ        | フキ            | 欠配以前から利用, 乾燥保存, 塩蔵 |
| モミジイチゴ    | ムギイチゴ         | 欠配以前から利用, 保存せず     |
| ユキノシタ     | イドグサ          | 欠配以前から利用, 保存せず     |

ところで「欠配」のときに特によく利用した野生植物はそれほど多くなく、またそのうち貯蔵性のあるものは、カシワ、クズ、コナラ、トチ、ミズナラ、ワラビで、このうちカシワ、コナラ、ミズナラはそのドングリである堅果を、クズとワラビは根茎を利用した。またクリは「欠配」時だけではなく、現在でも拾って食べているが、これも「欠配」時にはかなり多量に利用された貯蔵性のある堅果類である。

年々集落や大坂本集落に限らず北上山地の山村では必ずといってよいくらい話に出てくるのが、救荒食としてのシタミの利用である。シタミとは、コナラ、ミズナラ、カシワの堅果のことである。もちろんタンニンなどの渋みの成分があるためアク抜きをしなければ食用にはならない。そのアク抜きの方法はすでに発表している [岡 1987] のでここではふれないが、シタミはアク抜きして食品化するのにはまる一日かかるので、大鍋で一度に多量（量にかかわらず手間は一日かかるため）に作るものだった。このため、夏には腐敗を恐れてあまり利用されなかった。また、激しい労働のある夏は雑穀を食べ、冬はあまり重労働がないのでシタミを食べたと説明する人もいる。いずれにしても、シタミが主に冬から春にかけてよく利用された食料であったことは、どこの地域の話者も語る場所である。

大坂本集落ではシタミは、標高 600 メートル以上の、ミズナラの大木が群生し下生えが少なくて実を拾いやすい国有林で採集された。採集してきたシタミは、囲炉裏の上にある乾燥場である「ケダ」と呼ばれる場所に、いつも薪の煙で燻される状態で貯蔵され、その貯蔵量は 3 石から 5 石に及んだという。

これらのシタミの栄養量を計算すると、成人一日当たりの必要な熱量を 2000 カロリーとおき、ミズナラ 100 グラム当たりの熱量は 287 カロリーだから、一日約 697 グラムのシタミがあれば一日

分の熱量を補給できることになる。筆者が実験したところでは、1升の乾燥したシタミをアク抜きすると、1.225キログラムのアク抜きしたシタミが取れたので、平均4石のシタミからは490キログラムのアク抜きしたシタミが得られることになる。かつての安家における出生力はかなり高く [岡 1985]、家族の人数が多かったので一家族平均8人いたとしても、4石のシタミがあれば87.9日分、約3か月分の栄養量が確保されていたことになる。

もちろん実際にはずっとシタミを食べていたわけではない。聞き取りによれば、通常は8升炊きの大鍋でシタミをアク抜きし、これが5人家族の家で3～4日分の主食になったという。

この場合に食品化できるシタミの量は、シタミド（アク抜きの際には必ず水を替えるためのシタミドと呼ばれる筒を中央に立てる、写真1参照）の空間部分を除いて7升をアク抜きしたと仮定すると、上記の計算方式により、8.575キログラムで8人家族の1.5日分の栄養量であり、おおざっぱにみて必要栄養量の約半分弱をシタミでまかなっていたことになる。

また大坂本集落においては、自家の畑からの収穫で得られる雑穀（ここでは昭和40年代まで水田はほとんどなかった）で一年を自給できる家は1,2軒で、多くの家は6～7か月分しか得られず、残りの食糧は雑穀や米を買うか、こうした堅果類など野生の食用植物に頼るしかなかったといわれている。

旧安家村全体での食料自給率はどうかであったかについては、当時の主穀生産の場であった畑作（常畑と焼畑の経営）の状況から推定することができる。北上山地の山村では、常畑では2年3毛作とって初年度の春にヒエを蒔き、秋に収穫後大麦を植え、春にこの麦の間に大豆を蒔いて2年間で3種の作物を栽培するのが基本的パターンであった。そしてこのヒエがアワや

表4 秋の可食植物の利用

| 和名     | 方名           | 利用形態              |
|--------|--------------|-------------------|
| オオウバユリ | イペーロの根       | 欠配以前から利用、まれに最粉で保存 |
| オニグルミ  | クルミ          | 欠配以前から利用、乾燥保存     |
| カシワ    | カシワギ(堅果をシタミ) | 欠配時に利用、保存         |
| ガマズミ   | ソメの実         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| キクイモ   | ゴシヨイモ        | 欠配以前から利用、漬物       |
| クズ     | クゾ/クゾフジの根    | 一部で欠配時利用、まれに最粉で保存 |
| クマヤナギ  | トンヅラの実       | 欠配以前から利用、保存せず     |
| クリ     | クリ           | 欠配以前から利用、乾燥・砂理保存  |
| ヤマグワ   | クワの実         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| コナラ    | コナラ(堅果をシタミ)  | 欠配時に利用、乾燥保存       |
| サルナシ   | シタクチ         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| サンショウ  | サンショの実       | 欠配以前から利用、保存せず     |
| トチノキ   | トチ           | 欠配時に利用、乾燥保存       |
| ハシバミ類  | ハシバミ         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ブナ     | ブナの実         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ホドイモ   | ホド           | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ミズナラ   | ナラ(堅果をシタミ)   | 欠配時に利用、乾燥保存       |
| ヤマノイモ  | ヤマイモ         | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ヤマブドウ  | ヤマブンド        | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ヤマボウシ  | ヤマガアの実       | 欠配以前から利用、保存せず     |
| ワラビ    | ワラビネ         | 欠配以前から利用、まれに最粉で保存 |

表5 冬の可食キノコの利用

| 和名      | 方名           | 利用形態             |
|---------|--------------|------------------|
| アカヤマドリ  | モチタケ         | 欠配以前から利用、保存せず    |
| アミガサタケ  | ヤツカリ         | 一部で欠配以前から、保存せず   |
| アミタケ    | アミコ          | 近年になって利用、一部で保存   |
| カラカサタケ  | ツルタケ         | 近年になって利用、保存せず    |
| キクラゲ    | キクラゲ/ミミキノコ   | 欠配以前から利用、乾燥保存    |
| キシメジ    | キンタケ         | 近年になって利用、一部で保存   |
| クリタケ    | アカモダシ        | 近年になって利用、保存せず    |
| コウタケ    | バクロウタケ/クロキノコ | 欠配以前から利用、乾燥保存、塩蔵 |
| サクラハメジ  | サクラシメジ       | 近年になって利用、販売が主    |
| シイタケ    | シイタケ         | 欠配以前から利用、塩蔵      |
| シモフリシメジ | ギンタケ         | 近年になって利用、一部で保存   |
| ナメコ     | ナメコ          | 近年になって利用、醤油漬、塩蔵  |
| ナラタケおよび | ポリ/ポリポリ/ビリメキ | 欠配以前から利用、塩蔵      |
| ナラタケモドキ | カックイ/サモダシ    |                  |
| バカマツタケ  | マツタケ         | 近年になって利用、一部で保存   |
| ハツタケ    | ハツタケ         | 近年になって利用、保存せず    |
| ハナイグチ   | ヤクヨウダケ       | 近年になって利用、販売が主    |
| ハナヒラタケ  | マツマイタケ       | 欠配以前から利用、保存せず    |
| ブナハリタケ  | カヌカタケ        | 近年になって利用、販売が主    |
| ホウキタケ   | ホウキモダシ       | 近年になって利用、販売が主    |
| ホンシメジ   | シメジ          | 欠配以前から利用、乾燥保存、塩蔵 |
| マイタケ    | マイタケ         | 欠配以前から利用、乾燥保存、塩蔵 |
| マスタケ    | マスタケ         | 欠配以前から利用、塩蔵、漬物   |
| マツタケ    | マツタケ         | 欠配以前から利用、乾燥保存    |
| ムキタケ    | ハンドウゴ        | 欠配以前から利用、塩蔵      |
| ヤマブシタケ  | スシベグリ/ウサゴダケ  | 欠配以前から利用、保存せず    |

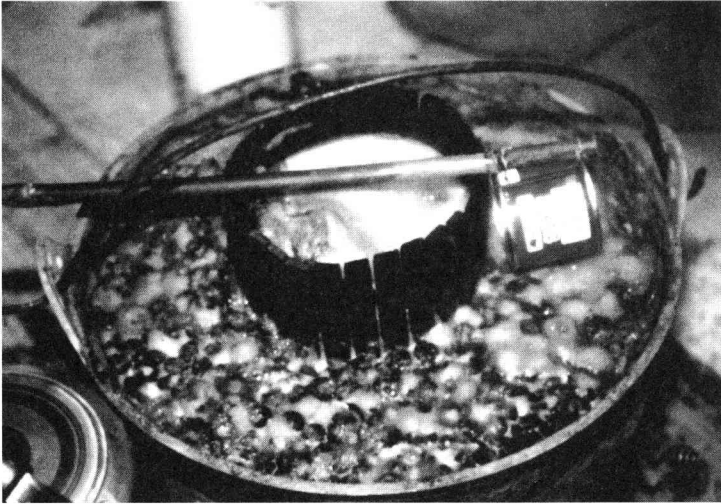


写真1 鍋の中央にシタミドを立てたドンダリのアク抜き

キビなど他の雑穀に変わったり、麦は大麦であつたり小麦であつたり、大豆は小豆に変わったり、やせた耕地では秋作を抜いたり、ソバを植えたり、といったバリエーションがあるわけである。焼畑でも基本的にこの常畑で栽培される品種と同じものが作られていて、焼畑固有の作物というものがほとんどないのが、北上山地の焼畑の特徴のひとつである。

家族7、8人の平均的な家庭で日に3回、当時の主食であつたヒエ・大麦の二穀飯を食

べるとすると、1日に精白したヒエを2升、精白した大麦を1升を煮なければ間に合わなかつた[畠山 1989: 63-64]。この聞き取りは安家でのものではないが、年々・大坂本集落で昭和の初め頃を想定して聞いても、ほぼこれと同様か、もう少し多かつたとする答えが返ってくる。そこでこの数字を採用して考えると、1日に精白ヒエ2升、精白麦1升であるから、年間ではヒエ7石3斗、大麦3石6斗5升が必要になる。粗収量はヒエの場合3倍、大麦の場合2倍だから、ヒエ21石9斗、大麦7石3斗が必要だつたことになる。明治44年から昭和12年迄の安家における主要作物の平均反当収量は、ヒエは反当り1.38石、大麦は反当り1.62石であつた[積雪地方農村経済調査所 1938]。

2年3毛作で考えると、単純にヒエと大麦と豆だけ栽培して輪作すると仮定して、一軒の農家の所有する畑に、春はその半分にヒエが、残り半分には麦の間に豆が植えられるということになる。もちろんこれは実際には、ソバしか蒔かない痩せた畑などもあるので過大な設定であるが、とりあえずこれで計算してみても、ヒエを反当り1.38石で21石9斗を得るためには約1町6反の畑が必要で、全体ではその2倍の常畑がなければならないから、約3町2反の常畑が必要だつたことになる。またこの地方で多かつた刈り分け小作の場合は、半分は地主にとられるから、さらにその倍の面積が必要になる。

しかし実際には、昭和の10年代に安家へ調査に入った山口[1937]によれば、当時安家村全体で常畑面積が約210町歩、切替畑(焼畑のこと)が130町歩だつた。当時の安家の農家戸数は約200戸であるから、一戸当たりの平均所有耕地面積は、約1町の常畑と6.5反の焼畑を持っていたことになる。焼畑をあわせてみても一戸あたり平均1町7反程度と、自給に必要な面積の約半分しかなかつたわけである。これは、昭和13年当時の安家村は食糧の自給率が50パーセントしかなかつた[積雪地方農村経済調査所 1938]とする農業経済学的調査の報告と合致する。

こうした食料の自給が厳しい状況にあつてシタミは、とくに冒頭で説明した「欠配」と呼ばれる配給制度が機能しなかつた昭和20年から25、6年までは、全面的に復活して利用された。こうした時期に復活した救荒食としては、ワラビやクズの根茎から水さらしによって得られるデンプンや、トチの実をアク抜きして得られるものにシタミ同様に黄粉をかけたもの、また山菜のウルイ(ギボウシ)を粒状に刻んで煮たものに黄粉をかけたものなどがあるが、利用しなかつたという人も少なくなく、その利用頻度は圧倒的にシタミが高くなつている。そしてようやく米や雑穀が流通し始め、

当時の炭焼きなどの現金収入からそれらを買って賄うようになって、昭和25、6年以降、シタミを食べることはなくなっていった。

しかし年々集落では、シタミではなくクリの採集がさかんに行われていた。クリの採集と、子供のおやつとかお菓子としての小規模の乾燥保存、または川砂に埋めるなどの保存は、北上山地山村で一般的にきかれるが、年々集落ほどの多量の採集・保存についてはあまり例がない。

年々集落で一番山も畑も多く持つ家では、自分の持ち山からクリを1シーズンに5斗入るカマスで18から20袋は必ず採集し、シタミはまったく食べなかった。つまり毎年約10石のクリを貯蔵していたことになる。またクリはヒナタヤマ（南向き斜面）のクリは甘く、ヒカゲヤマの（北向き斜面）のクリは甘くないため、なるべくヒナタヤマで拾うようにしていたということだった。

また山も畑も所有面積が少ないある家でも、国有林内でクリを1年に5石から6石、シタミを3から4石拾って、毎年消費していた。この家では牛の冬季の飼料であるヒクサ（採草地に生える山の草）刈りや、畑作物の収穫で非常に忙しい時期に、クリ、シタミの採集摘期が重なるため、クリを優先的に拾い、シタミは枯れ葉が落ちる前に（落ちるとシタミが見つけにくく拾いにくい）拾うようところがけたそうである。クリは国有林で拾うため、周辺の多くの人が拾いにくるので、朝早くから出かけて行って争うように拾ったという。

また別の家ではやはり自分の山にクリの大木を所有し、夫婦二人で朝と夕に2回拾いに行つて全部で1石になったとか、1本の木から朝飯前に拾いに行つただけで2斗も拾える木があったという。

拾ったクリは生のままむいて渋皮を除いた後、天火で乾かし、さらに囲炉裏の上にかけてタナに干してオシグリにして保存した。食べるときはそのまま煮て食べたのであるが、オシグリにするとクリの量は半分に減り、これを一年でたいてい食べ尽くしていた。

ここでも試算してみると、先と同様の計算方法により、生クリの100グラム当たりの180カロリーであるから、一日成人が必要な2000カロリーを得るためには、一日約1111グラムのクリが必要である。筆者の計量によれば、生クリの重量は1升が約1420グラムであり、採集した10石のクリは外皮と渋皮を剥ぐので廃棄率を3割と仮定して7石の生クリは、約994キログラムになる。よつてこれらの10石のクリの貯蔵により、8人家族の111.8日分、約4か月弱分の栄養量が確保されていたことになる。

ちなみに、北上山地と同様に堅果類がよく利用された飛騨地方における明治初期のクリの利用を「裴太後風土記」[1873]にみると、その採集量は収量記載のある村の平均で1村当たり5石となつており、一戸の採集量10石がいかに大きな値であるかがわかる。

年々集落のとなりにある川口集落は、弘化4（1847）年に起きた三閉伊一揆の遠野強訴の際の指導者の一人、俊作の出身地であるが、彼の日記[佐々木1981]には天保から嘉永にわたる記録がある。この中で野生食用植物について書かれた部分を拾い上げると、天保7（1836）年には「此年雪無之候て 年内より葛蕨掘通し 此辺にて大分宜敷候」、天保8年には「椎実（シタミ）少々成る

是にて大分助り候」、天保9年には「根花一升百五十から百八十（単位は文か？）迄」とあつて、クズやワラビの根茎から取るデンプンは商品になっていたようである。天保10年には「栗したみ沢山になり万民大にひろい取悦びかぎりなし けかつの事を直に相忘 人至ておごり申候」、天保14年には「蕎麦大小麦少々悪し 木の実も不足」、天保16年にも「したみ沢山になり…云々」とい



う記述がある。とくにこの地方でいう7年ケガツ、つまり7年間も毎年飢饉が続いたというのは、天保3年から9年のことをさすので、天保10年のクリやシタミがたくさん成って、皆で拾って喜び限りなし、飢饉のことをすぐに忘れてしまいはしゃいでいる、ようやく7年ケガツを耐えぬいた村人の気持ちは想像に難くない。そしてやはりシタミと併せてクリもケガツを乗り切る食糧のひとつだったということがわかる。

このように藩政時代からシタミとクリ、そして商品にもなるクズやワラビのデンプンが、重要な山村の食糧であった。ちなみにワラビのデンプンは、この日記から商品価値を持っていたらしいことがわかるが、掘り取るのが堅果の採集よりも重労働であり、デンプンを水さらしによるアク抜きによって食べられる状態にするのに3日ぐらいかかった。このため聞き取りでは、美味しいけれど日常食ではなく、珍しいお菓子の類という位置づけで語られる。食べるときはデンプンを水で溶いて煮つめ、ワラビモチ、クズモチとして黄粉をかけて食べていた。

実際には、クズやワラビの根茎を取る作業はむしろ、その跡地を焼畑に使うのが主眼で行われた付随的なものだという人もいる。であるからクズやワラビについてはおくとしても、シタミやクリなどの堅果類の利用は、藩政時代から用いられていた、かなり持続性の高い、危機的状況に対応する技術だったのである。

基本的に常畑における畑作だけでは自給できなかった山村が、「欠配」という事態で外部社会から食料を受け入れる道が断たれた時、彼らの取った対応策は堅果類の利用であり、焼畑の耕作だった。それはしかし7年ケガツにもみられた対処法であり、また突然復活した技術でもなく、一部の貧しい家、耕地面積の少ない家、家族の多い家では、概ね継続的に行われ、伝承されてきた方法だった。かつての山村では、当時の牛の繁殖生産や養蚕、流送など限られた現金収入も、その時代の経済的変動によって大きく変額し、畑や山を手放して名子にならざるを得なくなることがあった。また子供に恵まれず、労働力が不足する家がある他方で、10人の子を育てなければならない家もあり、通年家族が暮らしていく食糧を確保することは容易なことではなかった。極端に商品生産に偏っても外部経済の変動で収入は安定しないし、もちろん自給自足で暮らしていけるほど豊かな耕地があるわけでもない。そうしたこの時代の北上山地の山村のおかれた不安定な状況にあって、食べていくという最低限の生存を保つためには、商品生産をしながらいつでも自給部分を拡大できるようにしておくことが必要だった。この自給部分を拡大する技術として、これまで述べてきたような堅果類の利用と焼畑の耕作があり、これらの技術は村の中のどこかで常に生きていた技術であるといえる。そしてそれは古文書や伝承によれば、江戸後期とほとんど変わりはなく、山村の人々がその不安定性の中で生きていく方途として、安家で生存していく上でもっとも基本的であり、また遅くとも天保7(1836)年から、近年では昭和25(1950)年ごろまでの少なくとも100年以上にわたって有効性を持ち得た持続可能性の高い技術であったといえる。

## ⑥……………生業の変遷と「居住地域内完結型生存戦略」の成立の背景

### (1) 植生…卓越したミズナラ林の存在

年々集落ではクリが主食の代用食の主でシタミは従として扱われ、それ以外の大坂本集落をはじ

めとする多くの山村で、ほとんどシタミばかりが主食を補う食糧とされてきたのはなぜだろうか。実は、年々集落では他の集落に比べて私有林が多く、しかもその植生は安家地区内でも比較的クリの木が多かった。これに対して大坂本集落になると、標高 500 メートルでは植生としてミズナラ・クリ林の型の植生の上限より高く、クリがまとまってある場所はほとんどないため、クリを採集しようにも多量に拾える森がなかった。また他の集落では国有林が卓越し、民有林もいわゆる村外地主の所有地が多く、自由に利用できる森林面積が狭かった、という理由も併せて考えられる。つまり地頭名子制度が発達した旧安家村にあって、ほとんどの家が自作農だったという特徴を持つ年々集落は、たまたまクリが豊富な植生の森を私有林として自由に利用できた。これは他の集落にはあまりみられない条件だった。だから年々の人々は、シタミと比較してアク抜きの手間もかからず、漁村との物々交換の対象ともなりえたクリを、優先的に貯蔵し食べていたのであろうと想像される。しかし、クリとシタミという違いはあれ、地域内にある野性植物を利用して生存を計るという意味では、この年々の生存戦略も、シタミを利用した多くの北上山地の集落と本質的に違いはない。

またクリの木は、大坂本集落や、大坂本集落より標高の低い潜在的にはクリ林が分布する地域でも、枕木の用材として伐採されたことが無視できない。

明治の後期、安家ではまだ車が通れる道がない時代、春の増水時に止めをつくってたまった川の水に浮かばせた材木を、止めを切って一挙に流す「流送」という方法で、最初は銃床の材として太いクルミ材が、安家川の河口まで運ばれるようになった。このクルミ材の流送は、長くは続かなかったが、その後、全国的に鉄道が延長されていく中で、クリ材が枕木として需要が伸び、大正から昭和の初めにかけて盛んにクリの流送が行われた。このため国有林内の川に近い場所のクリは、ほとんど伐採されていった。年々でも枕木の伐採は行われたが、それは主に国有林からであり、私有林から切る場合は採集適地のクリの木は残しておいた。もともと植生的にもクリ林が優占するのは下流域に限られていたことに加えて、この伐採のためクリの採集適地はいよいよ少なくなり、年々以外の集落ではより主食の代用としてのシタミの比重が高くなったのではないと思われる。

これに対してシタミの実をつけるコナラ・ミズナラの木も、炭の原木としてその多くが切れ、木炭王国と呼ばれたこの地域ではその伐採量はクリの比ではなかったと思われるが、その開始は遅い。東北の農村恐慌の対策のひとつとして、営林局は昭和 9～10 年頃に安家と久慈間に自動車用の林道を開設し、それまで人や馬の背によって峠越えで運搬せざるを得ないため生産量も大きくなかった製炭が、全村的に本格的に開始される。

その後、昭和 16 年に炭の原木の払い下げ組合が結成されて、国有林からのナラ材の伐採が本格化する。こうした製炭開始以前の安家の国有林は、藩政時代のたたら製鉄の時代の大規模な伐採以降、前述した川沿いのクルミ・クリ材の伐採以外には、大きな利用はなかった。だから戦後の「欠配」の頃は、まだまだミズナラの樹林が残っており、その木 1 本の下で一石のシタミが拾える「一石ナラ」と呼ばれる巨木も残されていて、シタミを採集するには困らなかった。「欠配」以降にも木炭生産が着々と伸びていった事実からも、原木となるナラ材が豊富に残されていたことが予想される。

ここでシタミの採集に必要な条件について検討を加えておく。年々の事例でも述べたが、拾いやすい条件として下草が少ない林床であるという点ほどの話者も指摘するところである。ミズナラや

コナラは伐採しても切り株からまた萌芽再生し、数年後には実をつけるのだが、こうした若木の林床へは棘を持つ下草も多いため入りにくく、堅果も見つけにくいいため採集効率は悪い。やはり数十年を経て樹高も伸び、樹冠に太陽を遮られて下草も少なくなってからでなければ採集には適さない。一石ナラのように一本からでも多量のシタミが拾えるような樹林と比べれば、伐採後の二次林の若い段階でのシタミの採集効率の悪さは予想できるし、実際今でも老嫗らがシタミを食品化する際には、下草がなくて比較的太いナラの木のある場所へ採集に出向く。だから基本的には、シタミの効率的な採集を考えると、採集にはいかに実はつけていても伐採後十数年の若木の林は適さず、時を経て極相に近づいたナラ林が適しているわけである。

具体的にこうした採集効率のよい林が形成されるのにかかる時間は筆者も把握していない。ただかつてのシタミ採集地で、戦後昭和30年代に伐採されたミズナラ林が、その後萌芽更新されて現在約40年を経ているが、そうした場所においても、老嫗たちは昔の採集地では木も太くてシタミの落ち方は林床にぎっしりと敷き詰められたようであり、こんなものではなかったと述懐する。昔のような欠配がくれば、今では皆生き残れまいと老嫗らが言うのはこうした背景がある。

ところで、堅果類の救荒食として全国的に知られているのは、例えば中部山岳地帯でもドングリではなくトチの実である[松山1982]。中部山岳地帯では、ドングリは利用されることは稀であり、またまずいものとしてトチの実よりも評価が低い。ところが北上山地の山村ではトチよりもシタミが圧倒的によく利用され、その評価も高い。先の俊作の日記でもトチの実は出てこない。ただ昔の言い伝えの中には「トチの木三本持たない家に嫁に行くな」というのがあり、トチの実がまったく用いられなかったのではなく、万一の救荒食として何本かは家で確保しておくべきものであったが、毎年の主食の不足を補うものとしてはそのアク抜きの難しさ、面倒さ、量の確保の難しさがあつて、あまり利用されなかったということではないかと思われる。

こうしてみると、北上山地の山村では自然植生としてコナラやミズナラの大木の森を村の後背地に持つことをうまく活用して、シタミ利用に特化してきたように思われる。そして考えてみると、藩政時代のたたら製鉄も砂鉄の供給よりも木炭の供給が大事で、木炭の原木がなくなると鉄山を移動させた[森1969]のであり、その後昭和10年以降の製炭産業の隆盛、そして主食の代用として百年以上続いたシタミの利用、あるいはその林内・林縁で採集される山菜・キノコ類や狩猟(マタギ)の対象となる野性動物の利用など、北上山地はコナラ林・ミズナラ林の豊富な資源が前提にあつてこそ、生業・暮らしが持続的に営まれてきたのである。

ミズナラ林を原植生に持つ地域は、東北地方の中でも北上山地に集中している(図2参照, 出典: 青野ら1975)。このほかには、青森県東部のいわゆる南部地方に原植生としてブナ・ミズナラ林がまとまって分布しているが、これ以外にミズナラが入った樹林を原植生としてまとめた面積を持つ地域は東北地方にはない。東北地方において、北上山地山村ほどミズナラ林の資源に恵まれた地域はほかにはなかったのである。西南日本と東アジアを含む文化論である照葉樹林文化論に対して、東北日本についてはナラ林文化論が提唱されているが、これとは全く異なる文脈において、北上山地はまさに所与の豊かなナラ林の資源を継続的に利用してきた文化を持った地域ととらえることができるだろう。

これは逆に言えば、北上山地の堅果類の利用や製炭などの生業活動は、豊富なナラ林の分布を前

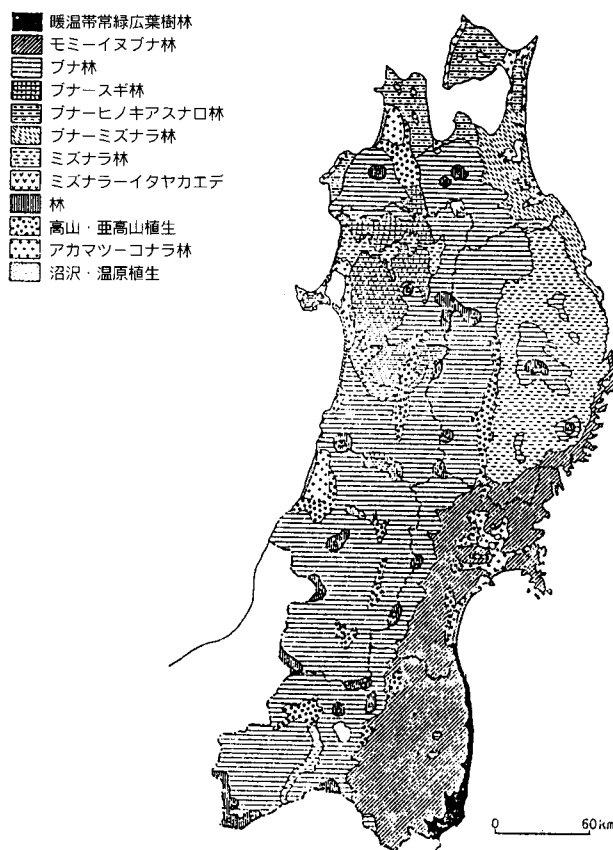


図2 東北地方の原植生

提に成立したものだったということになる。「居住地域内完結型生存戦略」の成立の条件のひとつとして、このナラ林の大いなる資源量が重要であったのである。

## (2) 出稼ぎと製炭…通年稼働型生業の出現

柳田 [1931] はその著書『日本農民史』のなかで「北国人の出稼ぎのごときは、久しい以前の固定した一慣行であった」とし、「これ（出稼ぎ）を常態としてその基礎の上に、仕組まれたる地方農村の経済であった」と述べ、その原因を、「生産規模のいたって小さいことで、また天然の制限ことに耕地面積の不足のため、一年中引き続いての労働の場として、充分ではなかった」としている。津軽地方に限らず東北地方においては、現金収入の不足を補うために農民が出稼ぎに出るのは、昔からごく普通のことであった。この意味では、地域外に出て生きていこうとする生存戦略も普通にあった、ということになる。

昭和の初期までは、安家においても北海道・樺太への出稼ぎが行われていた。このため安家で聞かれる北海道にまつわる話はいろいろある。川でイワナやヤマメを突くために大正の初めごろから利用されたマルッポと呼ばれる離頭式のヤスは、北海道アイヌが用いる（マレックか？）の出稼ぎに行った人が見てこれを真似たものであるとか、北海道で出会った老アイヌが、安家を知ってい

て懐かしがり、次にくるときは安家の沢の水をくんで来てくれといったとか、真相はともかく日常の世間話にはしばしば登場する。2章で述べた三閉伊一揆の指導者の俊作も、明治以前に蝦夷地に移住しており、その手紙が当時の周辺山村の北海道出稼ぎ者の手によって、安家の家族へと運ばれていた [茶谷 1980]。さらに大正の初め頃、当時北海道で多かったという捨て子を、出稼ぎに行った子のない夫婦が安家に連れ帰り養女にしたといった例もある。

また、明治期には北海道へ移住した人も多く、家屋敷や畑、山を売って家族で移住する例もまれではなかった。著者が長期にわたり調査している安家地区上流の大坂本、坂本、大鳥の3集落では、明治初めの全戸数14戸のうち、明治33年1戸が家族で北海道に移住し、もう1戸は長男家族を残して両親と次男が明治43年に移住、移住はしなかったが良く北海道に出稼ぎに出っていたといわれる家が2戸あった。またこの3集落の他に折壁、大平、立臼、松ヶ沢を含む7集落(明治初期戸数56戸)に本籍があった者のうち、明治から昭和25年にかけて、北海道または樺太で出生あるいは死亡、失踪、婚入、婚出、転籍、分家したことが岩泉町役場資料などによって確認できる人は46名いる。その内訳は表6に示したように、出生2人、死亡6人、婚入1人、婚出1人、養子縁組2人、失踪5人、分家3戸15人、転籍4戸14人である。

表6 旧安家村と北海道・樺太との間の人の動き  
(明治初期から昭和25年頃まで)

|    | 出生 | 死亡 | 婚入 | 婚出 | 養子縁組 | 失踪 | 分家 | 転籍 | 計  |
|----|----|----|----|----|------|----|----|----|----|
| 明治 |    | 2  | 1  |    | 1    | 5  | 1  | 2  | 12 |
| 大正 | 2  | 3  |    |    | 1    |    | 14 | 7  | 27 |
| 昭和 |    | 1  |    | 1  |      |    |    | 5  | 7  |
| 計  | 2  | 6  | 1  | 1  | 2    | 5  | 15 | 14 | 46 |

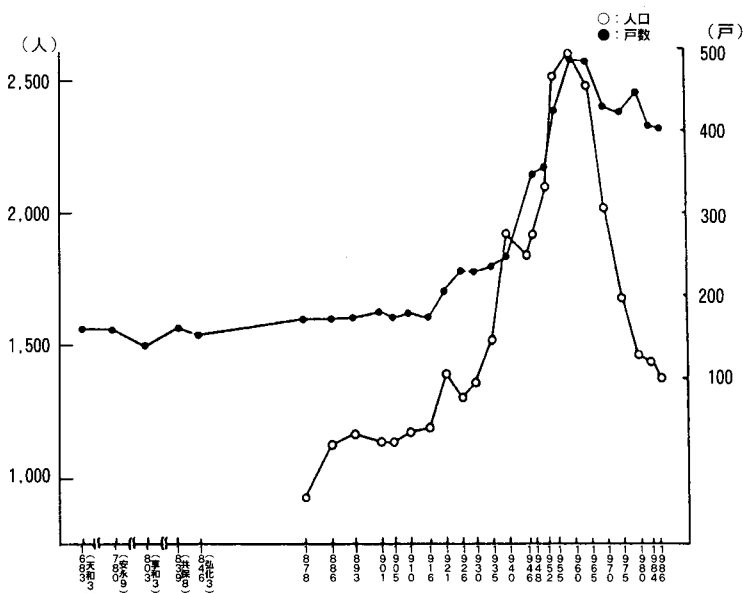


図3 安家地区人口・戸数の推移

旧安家村の人口の推移(図3)を見ると、明治から大正にかけては緩やかな増加をしめしていたものが、昭和の初めから急激に増加しはじめ、昭和30年代をピークに急激な減少へと転じている。この急激な増加と減少は、安家村下流集落の一部ではもう少し早い、だいたいにおいて炭焼きの全村的な開始時期である昭和10年と、専業製炭者が安家を去り炭窯の煙が消えていくのが昭和40年過ぎごろという、安家の製炭の歴史の盛衰と重なる。これまでの聞き取りで、大戦中に疎開などによって人口が増加したという話は聞かれない。また、これまで述べてきたように第二次世界大戦後「欠配」によって食糧事情が厳しかった安家地区では、引上げによる人口増加はほとんどなく、実際に戦後すぐの時点ではそれ以前よりも人口は一時的に減少している。製炭者の流入と流出がこの人口変動の要因の最も大きなものであった。

製炭という生業が登場する以前の安家では、現金収入源となる生業は秋の牛市で仔牛を売って収入を得る牛飼養と、春・夏の養蚕、そして大正期にはじまった枕木の流送による

賃金収入が主なものだった。この流送も、春の雪解けによる川の増水を利用して枕木材を河口まで運ぶ、季節的に限定された労働であり、収入であった。原木さえ確保できれば、労働としては通年の稼働が可能である製炭という生業を得て以降、北海道方面への出稼ぎは、まったくなくなったわけではないが減少した。役場資料からも、昭和以降に北海道・樺太に転籍した例は2例あるが、これは昭和10年以前から実質的には北海道に住んでいたが最終的に籍を移したものと思われ、実際に一方には昭和6年から寄留していたとある。また昭和に入ってから北海道への分家はなく、いずれも明治・大正の事例であり、しかも聞き取りによれば、実質的には実際に分家の届けを出すよりも数年から十数年前から生活していた例が多いようである。

出稼ぎに出ない多くの村民は、製炭に従事するようになっていった。先に述べた昭和10年の農村恐慌対策の自動車用林道の開設を期に、昭和9年には165トンにすぎなかった木炭の生産量が昭和11年には888.4トンと5倍以上になり、翌年には10倍以上の1881.4トン、昭和13・14年には2000トン台と、爆発的といってもいいような増加を示す(表7参照)。この時期、営林署では安家村の経済更生に乗り出し、製炭技術指導、製炭農事実行組合の組織化、製炭原木の払い下げなどを行った。また村主催の炭の品評会の賞状は、今でも多くの家で飾っている。製炭従事者数も、昭和10年12月に安家村全体で専業者13名、副業者281名、炭窯の数79窯であったものが、昭和13年6月には、専業者150名、副業者360名、炭窯の数231窯に達する[積雪地方農村経済調査所編1938b]。また当時からずっと木炭原木の9割以上はナラであった。

第二次世界大戦が始まると、製炭者は米などの特別の配給を受けられるようになる。これによって地域外へ収入の道を求めるよりも、地域内での製炭に従事することを選択することが、食料を確保するためにはより有効な生存戦略となったのである。

戦時中の生産量の記録はないが、戦後の昭和25年で1854.7トン、以後また生産は増大し、昭和28年には4502.7トンになって岩泉町内(当時はまだ合併前で安家村)でこの年最大の生産量となる。以後も4000トン前後の生産を続け、昭和32年に最高の5750.9トンの生産を記録するが、これ以降は減少傾向となり、昭和35年に3015.7トン、昭和40年には2016.3トンになり、安家地区として最後の記録のある昭和45年には312.4トンの生産にまで減少する。

炭焼きが下火になっていく昭和30年代からまた北海道の森林の伐採を中心とした出稼ぎや、首

表7 安家地区における木炭生産量の推移(単位:t)

|       |        |        |        |        |        |        |        |        |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 昭和    | 9年     | 10年    | 11年    | 12年    | 13年    | 14年    | 25年    | 26年    |
| 木炭生産量 | 165    | 240    | 888.4  | 1881.4 | 2411.9 | 2619.7 | 1854.7 | 2541.5 |
| 昭和    | 27年    | 28年    | 29年    | 30年    | 31年    | 32年    | 33年    | 34年    |
| 木炭生産量 | 3133.7 | 4502.7 | 4005.1 | 3924.9 | 4052.9 | 5750.9 | 4022.8 | 3015.7 |
| 昭和    | 35年    | 36年    | 37年    | 38年    | 39年    | 40年    | 41年    | 42年    |
| 木炭生産量 | 3874.4 | 3136.2 | 2639.5 | 2559.4 | 1579.1 | 2016.3 | 1575.5 | 1388.7 |
| 昭和    | 43年    | 44年    | 45年    |        |        |        |        |        |
| 木炭生産量 | 1148.3 | 701.5  | 312.4  |        |        |        |        |        |

都圏などの都市部における土木工事への出稼ぎに出る人も一時的に増える。しかし一方では、炭焼きのための原木を国有林から払い下げていた集落単位の組合組織が、用材やパルプ材の伐採とその販売を目的とした組合に再編され、また民間木材会社による国有林の伐採のための地元雇用も拡大し、山仕事と呼ばれる国有林の伐採が地域住民の大きな収入源となる時代がしばらく続く。

安家においても、津軽農村のように全村をあげてというわけではないものの、主に北海道への出稼ぎは明治期から一部にはあり、主として明治から大正にかけては転籍・分家という形で安家から北海道へ移住して行く動きもあった。安家において「居住地域内完結型生存戦略」が大勢をしめる生存戦略であったのは確かであるが、一方では一部に「居住地域外志向型生存戦略」を取る人々もいたのである。しかしそうした生存戦略がある程度以上に拡大していかなかった要因として、筆者は製炭という通年稼働型の生業の登場が大きく寄与したのではないかと考える。この生業の登場によって集落ごとに木炭原木の国有林からの払い下げ組合が組織され、木炭王国と呼ばれるようになり、その収益は当時の安家の暮らしの支柱であった〔例えば鈴木 1958, 宮川 1965, 岡 1990 など〕。安家村村勢要覧による安家村の諸産業の生産額比率〔鈴木 1958〕をみると、昭和 26 年には木炭が 59.4 パーセント、昭和 30 年では 44.2 パーセントであるが、これは実際には当時全く販売されなかった農産物を含んでの数字であり、純現金収入の中での比率は、それぞれ昭和 26 年が 73.2 パーセント、昭和 30 年が 53.6 パーセントと推定される。

このように安家の基幹産業であった製炭は、農村恐慌対策による自動車道の開通を契機に急速に勃興した。これによりナラ林資源は木炭という商品を生み出す源泉へと変貌し、時代的背景もあって、人々は出稼ぎよりもこの新たな生業に傾注していったのである。

### (3) 農村恐慌時における農村と山村…娘の身売りと奉公

筆者はこれまでに、安家で発達した地頭名子制度の歴史は新しく、明治の後期以降のものであり、地区住民が子牛や繭の価格暴落など経済的なインパクトを受けるたびに、その負債を埋めるために自作農が土地を地頭に譲渡したり、地頭の牛を飼う牛小作を条件として金を借りたり返済を延ばしてもらおうという形で、小作や名子になっていったことを指摘している〔岡 1990〕。だからこうした地頭名子制度もある意味においては、住民が地域外に働きに行くことなく、小作・名子化しながらも地域内で暮らしていく方向性に導いたといえよう。

昭和の 6 年から 10 年頃にかけて繭の価格暴落と同時に東北一帯で凶作が続き、農民の飢餓や娘の身売りが農村恐慌として新聞などで大きく報道され、現地を踏査した記事なども発表されている〔無明舎出版 1991〕。当時農村からの娘の身売りはその悲惨さを印象づけたし、また山間部では米が食えずにドングリを食べている状況だと書かれている。こうした娘の身売りなど農村の悲惨な状況が、当時の右翼思想家や軍部青年将校らがテロやクーデターに走った動機のひとつであり、軍部勢力の拡大につながる要因のひとつになったとは、近代日本史の説くところである〔例えば、山崎編 1989〕。こうした娘の身売りも東北農村の取ったひとつの生存戦略であったと見ることも可能であろう。あるいは「居住地域外志向型生存戦略」の一変型とみることも可能かもしれない。しかし安家ではこうした生存戦略は取られなかった。

聞き取りによる農村恐慌の時代の安家の状況は、平地農村とは大きく異なる。これは畠山

[1989: 177] も指摘しているが、北上山地の山村では、昭和の初めに大きな恐慌があったという認識はあまりない。戦後の「欠配」の時は「せつかく収穫したものを、例え不作でも決められた量だけ供出しなければならなかったから苦しかった」が、昭和の初め頃は「供出もなかったし、米はまだ作っていなかったから」という。そしてこの昭和初期には村の富裕層でも、白米を食べるのは盆と正月だけであった。先に述べたようにドングリなどの堅果類の代用食は別にこの恐慌時に限らず、食糧が不足すればいつでも利用してきたものだったし、それを悲惨とも考えていなかった。また娘を売らなければならなくなるなどなかった。むしろこうした恐慌に対応する形で行われた営林局の国有林の炭材の無制限、廉価代金分納という決定を積極的に取り入れ、組合を作って国有林のクリを払い下げてもらって、枕木材として流送して収入を得ていることが目を引く。

もちろん当時村内の富裕層に娘が子守に行くという形での口減らしはあり、子供の多い家や、両親が出稼ぎなどで不在になる家では子供を奉公に出した。しかし経済的には苦しくなくとも、子供は奉公に出して修養させるべきだという考えの親もあり、そうした家でも奉公という制度を利用した。だから奉公に出ることはプラスイメージでとらえられ、奉公に行けば賤ができているととらえられて良い縁談につながり、小作や名子ではなく自作農に嫁入りする例が多かったという。そして、嫁に行くときには奉公先で嫁入り支度もしてもらえた。さらに奉公に行った家とは死ぬまで親戚づきあいが続く、現在においても、故人が半世紀以上前に奉公にきていたという理由だけで、かつての富裕層の家からも葬式に参列する。逆に奉公先で葬式を出すときには、親戚同様に嫁入り先から必ずかけつけた。富裕層から町議会などの選挙に出馬する際までも、こうした関係性が集票に役立ったという。昭和に入ってから、このような奉公・子守は、主に3軒の富裕層（うち2軒は名子を持つ）が受け入れていた。

このように奉公の慣行は、口減らしと修養というふたつの機能を果たしていた。前者については、外部への娘の身売りを防ぐ機能も果たしていたと考えられる。また逆に、大正の初めごろにさかのぼるものの、ある安家の富裕層の家では、盛岡周辺の水田地帯の困窮する家から、二人の少女を奉公人として預かってきた。この場合はもちろん売り買いではなかったと想像されるが、二人はこの家で育てられ、いずれも安家の自作農の家に嫁いで一生を終えている。葬式の時にも盛岡からの参列はなかったという。その後もこの家では、村内・村外を問わず多くの子女が奉公し嫁いでいった。

農村が困窮し娘が売られるといった状況がある一方で、農村の娘を引き取って育てている山村の富裕層がいたことを考える時、当時の北上山地の山村には、平地稲作農村とは異なる状況が存在したと思わずにはいられない。こうした違いはひとつには、まだ山村の経済が市場経済化されておらず、自給的であったことにあると思われ、その自給性を支えた畑作・焼畑と共にナラ林の存在はやはり大きかったといわざるをえない。富裕層や地頭は小作・名子の労働によって豊かであったのであり、彼らの生存を支えた大きな柱のひとつとしてシタミがあったのだから。

## おわりに

北上山地山村の「居住地域内完結型生存戦略」の成立基盤には、所与の植生として豊かであったナラ・クリ林の存在が不可欠であった。またこれを支えた条件として、製炭の隆盛や地頭名子制度



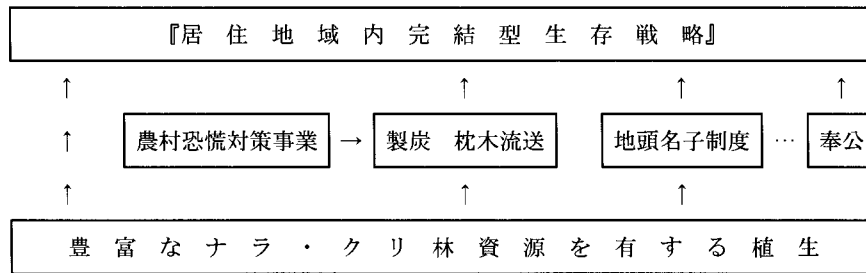


図4 『居住地域内完結型生存戦略』の成立の構造

の発達による出稼ぎの減少、そして富裕層への奉公の慣行により村外への人口流出がくい止められていたことがあげられる(図4)。こうした構図は、第二次世界対戦後の農地開放により地頭名子制度が解体し、奉公の慣行も消滅し、昭和40年代に製炭も衰微し、森林のほとんどが伐採されたことにより、現在では成立し得なくなっている。

なお、本稿のなかで年々集落についての記述は、岡[1987a]で発表した資料を再度用いている。また柳田の著書からの引用箇所については作道[1997]の論考から示唆を得た。3章(3)「農村恐慌時における農村と山村」については、国立歴史民俗博物館基幹研究「日本歴史における環境と人間生活に関する総合研究～日本歴史における労働と自然～」研究会における筆者の発表に対するコメント、なかでも松井健東京大学教授に示唆をうけた部分が大きい。研究会に参加された方々と、発表の機会を与我えていただいた篠原徹国立歴史民俗博物館教授に感謝する。

参考・引用文献

青野壽郎 尾留川正平編 1975 『日本地誌 第3巻 東北地方総論青森県 岩手県 秋田県』二宮書店  
 石塚和雄 1968 「岩手県におけるコナラ二次林とミズナラ二次林の分布および北上山地の残存自然林の分布について」『一時生産の場となる植物群落の比較研究 昭和42年度報告書』  
 岡 恵介 1985 「北上山地—山村における人類生態学的研究」筑波大学環境科学研究科修士論文  
 1987a 「山村におけるヤマ資源利用と自給性の確保」『九戸文化』第4号 九戸郷土研究会  
 1987b 「北上山地—山村におけるアク抜き技術」『岩手の民俗』第7号 岩手民俗の会  
 1990 「自給性を維持してきた山村の生活原理——岩手県 岩泉町 安家地区——」『白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究』弘前大学  
 1996 「季節と動植物」『講座日本の民俗学 第4巻 環境の民俗』雄山閣  
 1998 「アラキ型焼畑の多様性の意味」『現代民俗学の視点 第1巻 民俗の技術』朝倉書店  
 作道信介 1997 「新聞記事にみる青森県の「出稼ぎ」編制——近代化のなかの「出稼ぎ」試論、言説からのアプローチ——」『文経論叢』第32巻第3号 弘前大学人文学部  
 佐々木京一 1981 「安家村川口の俊作の日記 俊作雑攷」『81 いわいずみふるさとノート』岩泉民間伝承研究会  
 鈴木 力 1958 『アッカ——へき地の社会と教育——』岩手県学校用品株式会社  
 積雪地方農村経済調査所編 1938a 『畑作に関する調査(岩手県下閉伊郡安家村)』  
 1938b 『林産特に製炭事情に関する調査(岩手県下閉伊郡安家村)』  
 1939 『小作事情に関する調査(岩手県下閉伊郡安家村)』  
 茶谷十六 1980 『安家村俊作』民衆社  
 名本光男 1996 「生存機構としての村落社会——青森県西津軽郡車力村を事例として——」『村落社会研究』第2巻第2号  
 畠山 剛 1989 『縄文人の末裔たち』彩流社  
 松尾幹之 1980 「南部名子制度の構造と変貌」『名古屋大学農学部食糧生産管理学講座研究報告』第18号  
 宮川澄ゼミナール 1965 『辺地農民の意識と生活構造——岩手県下閉伊郡岩泉町安家の実態調査——』立教大学経

---

済学部

無明舎出版編 1991 『新聞資料 東北大凶作』無明舎出版

山口弥一郎 1937 「北上山地に於ける山村の生活」『地理学』第5巻第1号・2号

山崎博編 1989 『昭和恐慌』新人物往来社

(アレン国際短期大学, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(1999年7月6日 審査終了受理)

---

## Materialized Conditions of the Surviving Strategy in the Villages of the Kitakami Mountains, Northeast of Japan: *Mizunara* Forest, Charcoal Making, *Jito-Nago* System and Apprenticeship

Oka Keisuke

In the villages of the Kitakami mountains, there used to be frequent harvest failure and famine, and due to the heavy fief tax and the small acreage under cultivation, it was the most important task how to secure annual food. Many people of the communities have made the maximum use of regional wild plants, and have opened ground in the mountains under cultivation, thus they have secured necessary food (OKA, 1990). Activities of this kind are considered as the “surviving strategy completed within the quarters”, and some scholars think it quite common in mountain communities of the Northeast of Japan (NAMOTO, 1996).

The author of this paper has conducted fieldwork at Akka, Iwaizumicho, a small community in the Kitakami mountains. There, after the Second World War in the difficult period of obtaining food, people utilized *shitami* (acorn), after removal of harshness and opened land by the slash-and-burn method. These were almost the same as the ways to cope with famine during the period of the feudal government. This strategy had high potentiality of long duration, which actually had more than one hundred years of effectivity. In order to work out this strategy, the vast forest of *mizunara* (a kind of oak) was indispensable (AONO and others, 1975), which intensively distributed in the Kitakami mountains among areas in the Northeast of Japan. The *mizunara* forest was also necessary for the iron manufacturing with foot bellows in the feudal days and the charcoal making business after 1935.

In Akka like other places in the Northeast of Japan, some people worked away from home (*dekasegi*) since the Meiji period. However, this outside-the-quarter surviving strategy did not flourish in Akka, mainly because the villagers turned into tenants and serfs (*kosaku* and *nago*) under the *jito-nago* system developed from the Meiji period, and the whole year operated charcoal business grew prosperous by the countermeasures to the farming community crisis.

At the time of impoverishment of rural communities, it became an issue that young girls from the Northeast farming villages sold themselves into bondage. But in Akka, families which had difficulties securing food sent out their children into service of the wealthy classes, then there were no girls who sold themselves into outside bondage. Moreover, the wealthy classes in mountain communities sometimes took over girls from agricultural communities and brought them up. These

---

were possible because the mountain village economy was still fairly self-supporting, and the existence of *mizunara* forest was quite important, which sustained this self-support together with dry field farming and slash-and-burn agriculture. In other words, the wealthy classes were rich because of the existence of *kosaku* and *nago*, and *shitami* was one of the means which sustained the self-support of *kosaku* and *nago*.